

4月7日「信仰により結ばれる」阪口新牧師

聖書 ガラテヤ書3：21～29、ルカ福音書22：31～34

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。(Iコリント13:13)」私たちは3年間、この総主題のもとに歩みを進めてきました。そして、それぞれの年度に1年の柱としての聖句を選び、毎週声に出して読み、修養会のテーマとしたりしてきました。「2016年度 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。(ヘブライ書11:1)」 「2017年度 あなたの未来には希望がある、と主は言われる。(エレミヤ書31:17)」 「2018年度 愛はすべてを完成させるきずなです。(コロサイ書3:14)」皆さんにとって、これらはどのような聖句だったのでしょうか？しっかりと心に刻まれ、何か生きる指標となったり、霊的な糧となったのでしょうか？それとも「そんなんあったなあ」ぼんやりとしたものだったのでしょうか？役員会では肯定的な意見と共に「継続性が必要ではないか」「もっと具体的な目標があった方が良い」という意見が出ました。そこで次の3年間も総主題は変更せずに、各年度の主題聖句を改めて選び直すことにしました。2019年度の聖句はこれです。「**あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです**(ガラテヤ書3:26)」今年度は「信仰」という主題について改めて思いを深めていきたいと思います。

#### 1、130年間、教会が建てられ続けてきたこと

さて、2019年度、私たちが「信仰」について思いめぐらす上で、何より考えなければならないことは、多度津教会が創立130周年を迎えることではないでしょうか。私たちの教会は、香川県で最初のキリスト教会として130年前に(関西学院などを創立した)ランバス宣教師によって建てられました。それから変わることなくキリストへの信仰がこの地に保たれてきているのです。これは驚くべきことかと思えます。というのも、信仰には「危機」の時があるからです。

今日一緒にお聞きした福音書でイエス様は一番弟子のペトロにこう語られました。「**32節 わたしはあなたのために信仰が無くならないように祈った!**」驚きませんか？一番弟子、イエス様と最も親しく、周囲の弟子たちからの信頼も厚かったペトロに信仰が無くなる危機があったのです。そうです、この後、ペトロは最大の試練を受けます。イエス様が、捕らえられ、裁判にかけられ、十字架につけられようとする時、「お前はイエスの仲間だろう」と問われるのです。彼はその試練に耐えきれませんでした。3度イエス様のことを「知らない」と否むのです。あれほど大好きで、あれほど慕っていたイエス様のことを裏切ってしまうのです。

私たちには信仰が与えられています。これは神さまからの大きな恵みです。しかし、その恵みには様々な危機があることも事実なのです。私が学生だったとき、ミッションスクール出身で「聖書科の先生に憧れた。あんな先生に自分もなるんだ」そんな夢を抱えて入学した先輩がいました。ところが、彼女は神学生として奉仕していた教会で躓き、聖書科の先生ど

ころか教会に通うことすら辞めてしまいました。同じように牧師になるつもりで入学して、信仰を捨ててしまった人達を私は少なからず知っています。逆に私のように大して真面目に教会に通っていたわけでもないのに、今ここに立っているような者もいます。日本の教会は信仰者が少ないので、私たちはつつい洗礼を受け、信仰者となることをゴールとしがちです。洗礼を受けた人が出たら「受洗者が与えられた！良かった！祈ってたよ！」そう言います。それは本当にその通りで嬉しいことなのですが、しかし、実は信仰は持つことよりも、保ち続けることの方がはるかに難しいのです。

今日の聖書でイエス様は言われます。「わたしはあなたのために信仰が無くならないように祈った！」このあなたは誰のことでしょうか？決してペトロだけを指しているわけではないでしょう。教会から一步出たら途端に信仰者であることを忘れてしまうあなた。今日も愛の業が必要であることを知りながら「イエスなんて男は知らない」無関心を決め込んでしまうあなた。そうです。これは私たち一人一人のために、向けられた祈りなのです。「あなたの信仰が無くならないように」これは誰であろう私たちのためのキリストの祈りなのです！

先日、関学から中道先生が来られて、夜と一緒に食事をした時に先生がおられたドイツの教会の話になりました。ドイツでは牧師はほとんど公務員の扱いで、献金もほとんど集める必要がありません。教会税を自治体が徴収してくれるからです。じゃあ、教会は安泰か？・・・というところではありません。1000人位の会員がいる教会の礼拝に毎週集う人は90人くらい。巨大な大聖堂に集う人はほんのわずかです。この数十年で、かつてはキリスト教の中心と思われたヨーロッパではキリスト者の数は激減しています。今やその（数的な）中心は韓国やアフリカなどの地域に移りつつあります。そんな中で、このキリスト者の人口が1%にも満たない国で、それも人口減少著しい地方で、よく130年も教会が建てられ続けていると思います。それは奇跡に近いことかもしれません。だから私は教会が建てられ続けていると言うのです。もちろん先人たちの努力もあるのですが、それ以上に私たちの多度津教会には神様の力が働いているのです。何よりイエス様の「あなたの信仰が無くならないように」との祈りに支えられてきたのではないかと思うのです。

ところでボンヘッファーという牧師がこんなことを言っています。  
キリスト者は、神の言葉を語ってくれる他のキリスト者を必要としています。  
確信を失い、落ち込んでしまった時、いつもそのような人を必要としています。  
なぜなら、自分で自分を助けることはできず、そのような他のキリスト者がいなければ、真理を曲げることになってしまうからです。ですから、すべてのキリスト者のまじわりの目的も明らかです。

それは、お互いに救いの福音をもたらすものとして出会うことです。（Dietrich Bonhoeffer *Gemeinsames Leben* S.11 「共に生きる生活」より）

私たちには確かに信仰の危機があります。きつとたった一人で信仰生活を生き抜くということは不可能です。だから私たちには教会が必要です。キリスト者として共に信仰を分かち

合いながら歩んでくれる友が必要なのです。総主題では「信仰と希望と愛はいつまでも残る」と言われていますが、実際はそう簡単ではないと思うのです。信仰も無くなることもある、希望も失ってしまうことがある、愛など全く感じられない時がある、それでも信仰の友がいるから私たちは立ち続けられるのです。私にも、本当に辛い時に支え合える学生時代の友人たちがいます。皆さんにも同じような方がおられるのではないのでしょうか。私たちの教会は130年間、色んな時代を歩んできました。太平洋戦争、高度経済成長、バブル、様々な危機があったと思いますが、その時々と共に信仰の道を歩む友が支え合って歩んできたのです。そして、これからもその営みが続くようにと願います。「マタイ18:20 二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

## 2.信仰がすべてを超える力となり得ること

もう一つ、今日私がお話したいことがあります。この私たちが与えられている信仰に大きな力があるということ、それも全てを超える力があるということです。今日のガラテヤ書（つまり2019年度の聖句）にはこうありました。「26節 **あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。**」

少し説明っぽくなりますが、ここでの「信仰」とは何のことでしょうか？実は少し議論があります。それは私たちが与えられた信仰のことを指すかもしれません。キリスト教では信仰は私たちが自分の意志で持つものとはされていません。「**あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだ**」と言われている通りで、聖霊の働きにより私たちに与えられた恵みなのです。もう一つは、キリスト自身が示された信仰のことを指すかもしれません。ここで信仰と訳されるギリシャ語「ピスティス」は信頼という意味もあります。それに定冠詞がついているからです。キリストが十字架の死に従順であった、その力によって私たちは罪を贖われ神の子とされている。創り主なる神さまのことを「アッパ（父ちゃん）」と親しく呼ぶことが赦されています。そのことが大きな意味を持つというのです。こんな風に続きます。

「28節 **そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。**」

この信仰によって私たちは結び合わされているので、私たちの間にあるさまざまな障壁を私たちは超えていけるのです。ユダヤ人とギリシア人の障壁（ここでのギリシア人は異邦人全般を指します）、つまり民族や人種の壁がなく、奴隷や自由な身分の壁、つまり社会的に生み出された階層の壁もなく、更には男と女つまり性別の壁さえも超えていけるのです。このパウロの言葉には当時のローマの社会に浸透していた差別意識が前提とされているそうです。たとえば当時のユダヤ教のラビの言葉にこんなものが残っています。「ラビ・ユダは

言う。毎日唱えなければならない祝福がある。私を異邦人にされなかった神に祝福があるように。私を女にされなかった神に祝福があるように。私を田舎者（奴隷）にされなかった神に祝福があるように」とても差別的に感じますが、当時はこれが常識。パウロはこの常識に挑戦しているのです。

そして、この言葉通り、初期の教会は人々を分かち合おうと努力をしてきました。使徒言行録には初代教会の信徒たちが貧富の差を越えて持ち物を分かち合ったと書かれています。また教会では多くの女性の弟子たちが中心的な役割を果たしていたことが伺えます。マリアとマルタの姉妹、パウロの働きを助けたプリスキラ、またパウロの同労者にはユニアスという女性もいたようです。今もそうですが、キリスト者のコミュニティーでは女性が中心的な役割を担ったのです。それは当時の男性中心の社会ではありえないことでした。

私たちの教会のことを考えてみたいと思います。130年前にランバス宣教師は日本にやってきました。彼はもともとお父さんも宣教師で中国に長く住み、働いていました。また、医者でもありました。その功績が認められて、母国アメリカに帰れば、ある程度の地位は保証されていたはずですが。わざわざ、ようやく鎖国を解いたばかりで宣教が成功する保証もない日本に来る必要などなかったのです。なのに、どうして日本に来たのだろうか？「**そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。**」

ランバスにはアメリカ人も中国人も日本人もなかったのではないのでしょうか？ランバスにあったのはキリストへの信仰一つだったのです。信仰は力なのです。それも他者を愛する力なのです。イエス様もペトロに言われます。「わたしはあなたのために、**信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。**」私たちは信仰をそういうものとして捕らえているのでしょうか？ただただ自分自身を生かすためのものにしてしまっていないのでしょうか？もしくは自分の信仰を保つのに精いっぱいであることなど構ってられない、そんな風に考えていないのでしょうか？でももしかしたら私たちが本当に信仰を強められるのは、その関心が他者に向いた時かもしれません。信仰は私たちにすべての壁を越えさせる力なのです！

さあ、2019年度もその歩みが始まりました。教会創立 130 周年の記念すべき年に私たちはもう一度、自分たちの信仰に目を向けたいと思います。神さまから与えられた大きな恵みに、そして他者を愛する原動力となり得る信仰に目を向けたいと思います。先ほどのボンヘッファーの言葉をもう一度引用します。「**すべてのキリスト者のまじわりの目的も明らかです。それは、お互いに救いの福音をもたらすものとして出会うことです。**」私たちの新しい歩みに、素晴らしい出会いがありますように！